

黒い羊効果と内集団ひいき

—理論的検討—

筑波大学大学院(博)心理学研究科 大石 千歳

筑波大学心理学系 吉田 富二雄

Black sheep effect and ingroup favoritism: A theoretical review

Chitose Oishi and Fujio Yoshida (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Black sheep effect and ingroup favoritism can both be explained by social identity theory (Tajfel, 1978), although there appears to be a contradiction regarding the evaluations of inferior ingroup members. This paper discusses the salient factors of social identity, suggesting that there are external factors, such as the context for intergroup comparisons and status and size differences between in- and outgroups, as well as internal factors, of which ingroup identification is the most important. Although these external and internal factors function independently, they also interact within social identity. Moreover, according to the social self-regulation theory (Abrams, 1990), both of these factors should be influenced by public or private self-awareness. Drawing on social identity theory, social identity can lead to black sheep effect and ingroup favoritism. Although some studies have attempted to resolve the contradiction between black sheep effect and ingroup favoritism, these studies are not without problems, which are discussed in this paper in terms of 6 points of view. These problems must be resolved before black sheep effect and ingroup favoritism can be reconciled by social identity theory.

Key words: black sheep effect, ingroup favoritism, social identity salience, public/private self-awareness, intergroup comparison context, ingroup identification.

黒い羊効果と内集団ひいき

1. 黒い羊効果

集団における差別には、集団間の差別と集団内の差別という2つの問題がある。前者は、ある集団の成員をステレオタイプの様に一様に見なして、偏見な態度や差別的な扱いをとる問題である。後者では、ある集団の中で、仲間はずれにされる成員が出るような問題である。

ある集団の一員でありながら、その集団の規範からはずれる者が、逸脱者として排除される現象は、

“黒い羊効果(black sheep effect)”と呼ばれる。黒い羊効果とは、“内集団の好ましい成員は、同程度に好ましい外集団成員よりも高く評価され、内集団の好ましくない成員は、同程度に好ましくない外集団成員よりも低く評価される現象”と定義される(Marques, Yzerbyt & Leyens, 1988)。この現象は、家族や組織のやっかい者、あぶれ者を black sheep (黒い羊)と呼ぶ英語の慣用句にちなんで命名された(黒い羊効果の模式図を Fig. 1 に示した)。

Marques et al.(1988)は、黒い羊効果は内集団と外集団との比較場面において、内集団の評価を維持す

ることによって、自己評価を高く保とうとする動機から起こると考えた。この考えは、社会的アイデンティティ理論(Tajfel, 1978)に基づいている。社会的アイデンティティ理論によれば、人は自分の所属集団から自らのアイデンティティの一部である“社会的アイデンティティ”(Social Identity: 以下、SIと略記)を得ており、これを高揚することにより、自己概念の肯定性を保とうとする動機を持つ。劣った成員は、内集団の社会的アイデンティティの維持・高揚の妨げになるので、極めて低く評価して内集団から心理的に切り離すのである。

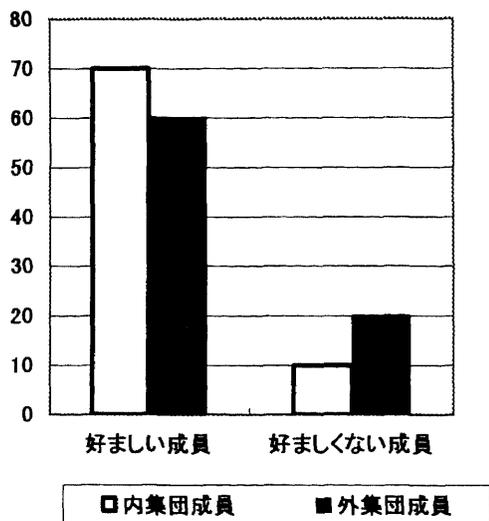


Fig. 1 黒い羊効果の模式図

2. 内集団ひいき

一方、集団心理学では、内集団の成員をひいきし外集団の成員を差別する、内集団ひいき(ingroup favoritism)と呼ばれる現象が報告されてきた(Tajfel, Billig, Bundy & Flament, 1971). Tajfel et al.(1971)は、最小条件集団パラダイムを用いた実験によって、無意味な基準で即席に分けられた集団でも、内集団成員に多くの得点が分配されることを示した。最小条件集団において内集団ひいきが起こるのは、たとえ些細な基準で分けられた集団であっても、ある集団の成員であることが、SI(Tajfel, 1978)の源泉となりうるためである。

内集団ひいきの測定に関して Tajfel et al.(1971)が用いた指標は、“分配マトリックス”である。これは、内集団と外集団の匿名の成員に報酬と見立てた得点を分配することで内集団ひいきの程度を捉える指標である(Table 1)。この指標は、SI理論の立場による内集団ひいきの、代表的な測定指標となっている。

分配マトリックスには、内集団ひいきを直接測定する「内集団ひいき」マトリックス、公平性の規範と対立させる形で内集団ひいきを測定する「内集団ひいき—公平性」マトリックス、内外集団の利益の合計を最大にする傾向と内集団ひいきを対比させる形の、「内集団ひいき—最大協同利益」マトリックスがある。分配マトリックスは、集団の評価そのものを表している。

このような内集団ひいきに対して、先述の黒い羊効果では、劣った内集団成員は同程度の外集団成員よりもさらに低く評価されるのである。つまり、両現象はともにSI理論によって説明されるが、劣った内集団成員の評価に関しては、一見矛盾しているように見えるのである。

Table 1 分配マトリックス

“内集団ひいき”マトリックス1														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
“内集団ひいき”マトリックス2														
	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5
	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
“内集団ひいき—公平性”マトリックス														
		2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
		26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
“最大差異—(最大内集団利益+最大共同利益)”マトリックス														
	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	
	5	7	9	11	13	15	17	19	21	23	25	27	29	

社会的アイデンティティ理論

1. 内集団ひいきに対する説明原理の変遷：社会的アイデンティティ理論の誕生

内集団ひいきは、黒い羊効果とは矛盾するように見えるが、1970年代以降のSI理論に基づいた集団研究においては、非常に根本的な現象として認識されており、現象そのものの頑健性も高いとみなされてきた。ここで、人が自分の仲間をひいきする傾向についての研究を概観し、SI理論が誕生するいきさつを紹介する。

従来、集団間差別の研究の中では、集団間の利害の対立や競争、集団内および集団間での対人関係の状況、内集団や外集団の構造、内集団成員と自己の態度の類似性などに、差別の原因を求めていた。しかしTajfel, Billig, Bundy, and Flament(1971)は、これらの条件をすべてなくした実験的な集団(最小条件集団という)を構成し、集団間差別の発生に必要な最低条件は何かを探った(このような方法を、最小条件集団パラダイムという)。その結果、ささいな基準で一時的に分けられた最小条件集団でも、報酬を分配する集団成員が匿名でも、内集団成員に多くの報酬が分配され、カテゴリー分けによる集団成員性さえあれば、集団間差別が起こることが示された。

もともと集団間の差別や偏見の発生メカニズムを探る研究の流れにおいては、権威主義的パーソナリティ仮説(Adorno, Frenkel-Brunswik, Levinson & Sanford, 1950)や、フラストレーション攻撃仮説(Dollard, Doob, Miller, Mowrer & Sears, 1939)、信念適合性仮説(Rokeach, 1960)、集団間の目標葛藤(Sherif et al. 1961)、相対的剥奪理論(Runciman, 1966)など、様々な立場から説明が試みられてきた。しかし、どの説も決め手に欠ける感があった。

権威主義的パーソナリティ説では、ある社会全体に共有された、特定の社会集団に対する偏見や差別の説明ができない。Minard(1952)によるイギリスのある町の炭鉱労働者に関する研究では、白人炭鉱労働者は日常の生活では路線バスで隣の席に座らないなど、黒人に対して差別的であったが、炭鉱内で労働する時だけは白人と黒人を全く区別せず、労働者を運ぶ炭鉱バスの中では、何のためらいもなく黒人の隣にすわったという。このような例は、偏見や差別をパーソナリティに帰属させる説からでは説明できない。権威主義的なパーソナリティを持つ人間だけが黒人差別に加担していたわけではなかった。また、第二次世界大戦中のユダヤ人に対する偏見や差別は社会全体に共有されたものであり、しかもきわ

めて短期間に発生したもので、親の養育態度の影響とはおよそ考えられない。同様に、フラストレーション攻撃仮説、相対的剥奪説、信念の適合性仮説でも、やはり集団全体に対して一様に差別が起こる現象を説明できない(ブラウン, 1993のレビューなど)。

2. 社会的アイデンティティ理論とは

SI理論では、これまでよりも“集団”の概念を発展させた。1970年代までのグループ・ダイナミクス研究が扱っていた、成員間に対面的相互作用のある小規模な集団を、“小集団(small group)”と位置づけ、人種や民族、宗教、国籍、性別、職業などの大規模な集団を、“社会集団(social group)”とした。この社会集団という概念を導入すると、ある人種などに対してある社会で一様に偏見や差別が起こる過程など、これまでの小集団研究をもとにした説では説明できない現象も説明できるようになる。

ターナー(1987)によれば、SI理論が説明対象とする“社会集団”の成立には、アイデンティティ(identity)が最も重要な概念であるという。ある特徴を持った人々の間で、その特徴が自らのアイデンティティとして自己概念の一部に取り込まれ、その特徴によって自己を認知し、定義できるようになることが、その人々を集団と呼ぶための第一の条件である。“ある特徴をアイデンティティとして共有し合っている人々の集まりが、集団と呼ばれる”といえる。SI理論およびその発展型である自己カテゴリー化理論では、諸々の集団現象の発生に関して、特定の集団への自己のカテゴリー化(self-categorization: ターナー, 1987)によるSIの獲得と、内外集団におけるSIに関する社会的比較の2つのプロセスを仮定している。この2つのプロセスにより、集団は個人の寄せ集め以上の存在となり、集団特有の様々な現象が発生する。最小条件集団において内集団ひいきが起こるのは、たとえ些細な基準で分けられた集団であっても、ある集団の成員であることが、SIの源泉となりうるためである。

人々がある集団を形成すると、集団内の成員間には実際以上の類似性が知覚され、他の集団の成員との間には実際以上の差異が知覚される(Tajfel & Wilkes, 1963)。その結果内集団成員と外集団成員は異なる存在として認知される。これをカテゴリー差異化過程と呼ぶ。また、Festinger(1954)の社会的比較理論によれば、自己の評価は他者との比較によって形成される。内集団から得るSIは自己概念の一部であり(Fig. 2)、人には自己概念をポジティブに保とうとする動機があるため、外集団との比較

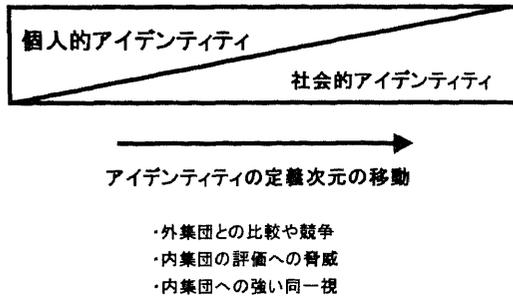


Fig. 2 アイデンティティの連続体

において内集団の優越性が示される必要が出てくる。これをカテゴリー間比較過程という。そのため、内集団の成員であるという事実がひいきを起す原因となりうるのである。

SI理論では、これらの考え方に立って、集団現象の発生メカニズムを、以下の3つの要点にまとめている。

1. 人は、自分の所属する集団からアイデンティティの一部を引き出している。それがSIである。
2. 人は、自らのSIを維持、高揚しようとする動機に従って行動する。
3. 人は、現在の所属集団から得るSIに満足できない場合、社会移動(所属集団を替える)、社会的競争(他の集団と競争し、他の集団を差別することなど)によって、自集団の優越性を保つこと、社会的創造(これまでとは違った次元で他の集団との比較をすることによって、自集団が優位になるようにすること)の3つの方略のどれかを用いて、自分のSIを満足なものにしようとする。

SI理論は、最小条件集団パラダイムによる内集団ひいきの発生を説明する過程で生まれたものである。しかしもちろん、内集団ひいきの発生が確認されたのは、最小条件集団のような実験的・一時的な集団だけではない。看護婦などの職業集団や、ヨーロッパにおける言語的集団(ベルギーのワロン人とフランダース人)など、実在の社会集団を用いた、より現実場面に近い形での研究も行われている。

Skevinton(1981)では、看護婦の中の公認看護婦(高地位とされる)と登録看護婦(低地位とされる)の比較において、いずれの看護婦も自分たちのほうが相手よりも優れていると評価したことを示した。またその際には公認看護婦では能力面で、登録看護婦では情緒面で自分たちのほうが優れていると評価した。低地位とされる登録看護婦の場合は、知性など

の能力面で外集団との比較を行うと不利であるので、内外集団の地位差の影響が出ないような評価次元を選ぶという社会的創造の方略を用いて、内集団ひいきを行っていることが分かる。これに対して公認看護婦では、能力という評価次元が内集団にとって有利なものであるため、評価次元を変えずに、社会的競争の方略に沿って内集団ひいきを行っている。このように、実在の集団を用いた、分配マトリックス以外の方法による研究でも、内集団の置かれた立場を考慮してSI理論における3つの方略を使い分けながら、内集団をひいきすることが示されたのである。

これらの実在の社会集団のほうが、実験的集団よりも成員にとって内集団成員性は重要であり、SI高揚の動機も強いといえる。このため、このような社会集団において明確に内集団ひいきの発生が示されたことにより、SI理論の妥当性はさらに強められたといえる。

社会的アイデンティティを顕在化させる要因

1. 外的要因

SIを顕在化させる要因は、外的要因と内的要因に分けられる。外的要因とは、主に集団間状況にかかわる要因であり、内外集団の比較の文脈の有無、比較対象となる集団間のサイズや地位の格差、および所属集団から別の集団に移れるかどうかという“集団境界の浸透性(permeability of group boundaries; Ellemers, Doosje, van Knippenberg & Wilke, 1992)”，内集団へのポジティブおよびネガティブな評価や期待などの要因である。

人が2つの集団の存在を認識するとき、いずれかに自分が所属していれば、内外集団の比較の文脈が発生することになる。2つの集団の存在がただ単に示される場合でさえ、比較の文脈は半ば自動的に発生するが、両集団が明確に比較される状況があれば、集団成員性はより一層明確に意識されることになる。加えて、両集団が何らかの目標達成のために競争をしている状況では、集団成員性はさらに明確に意識される。

少数派集団は、多数派集団との対比において、図と地の関係から目立ちやすい、目立ちやすい刺激は利用されやすいので(Higgins & King, 1980)、少数派集団の成員は、自分の集団成員性を明確に意識することになる。また、少数派集団は多数決等で不利になるなど、勢力面で劣位に置かれるようなことがあり、SI高揚の動機が強められると考えられる。

外集団が内集団よりも社会的評価が高かったり、

優秀であったり、社会階層が上位であったりする場合は、集団間比較の結果は内集団にとって不利で、SIへの脅威が生じる。低地位集団では、その格差の正当性を否定し、自集団にとって肯定的な集団間比較を行おうとする動機が生じ、高地位集団ではその地位を確保しようとする動機が生じるという(Turner & Brown, 1978など)。地位の格差が変動する可能性があるか否か、また、地位の格差に正当性があるか否かなどの要因の影響も大きいので、集団の地位の格差に伴う内集団成員意識の顕在化は、内集団ひいきなどの集団現象に直結するわけではない。集団境界の浸透性の影響は、集団の地位の問題との関連により、複雑なものとなる。現在の所属集団から離脱して、別の集団に簡単に移動できる場合は、内集団から得るSIに不満があれば他の集団に移ればよい。SI高揚の動機が強いのは、集団からの離脱が不可能な場合と考えられる。

さらに、内集団が外からポジティブもしくはネガティブな評価を直接受けるという場合がある(大石・吉田、印刷中)。特定の外集団との比較状況がなくても、集団の外部から、内集団について賞賛や批判があると、成員は集団成員性を意識しやすくなる。こういう場合には、集団成員性が顕在化され、内集団成員としてのSIも顕在化されるといえる。

2. 内的要因

SIを顕在化させる内的要因としては、内集団への同一視(identification)がある。これまでの議論は、どの人も一様に、自らの所属集団から得るSIを高揚する動機を持っていると仮定してきた。SI理論ではこの動機を集団現象発生の根本においているが、この動機の強さに影響する要因の一つとして、所属集団に対する満足度を挙げることができる。内集団に満足であると、内集団への同一視の程度が高くなり、自己概念のよりどころとしての内集団の重要度が高まり、自己概念におけるSIの重要度も高くなる。このとき、集団成員性は集団を意識させる外的な要因がなくても常に強く意識され、SIは顕在化されている。ただし、人は自らの所属集団を自由に選択できるとは限らない。民族や国家などのように、自己の満足度とはかかわりなく、自らの集団成員性を強く意識せざるを得ない場合もある。

以上より、内集団同一視を強めさせる要因は、外的要因とも関連するが、自分がその集団に好んで自発的に所属していること、自分がその集団に所属していることの正当性、他の集団に移動できる可能性、社会におけるその集団の置かれた地位、その地位の正当性や安定性などが考えられる。内集団への

同一視が高いほど、自己概念中のSIの重要度が高く、SI高揚動機が強いということである。

3. 自己意識(公的・私的自己意識)

さらに、SIの顕在化が集団間差別のような集団現象に結びつくまでの間には、自己意識の要因が介在することが考えられる。このような観点は、Abrams(1990;1999)によるSocial Self-Regulation理論(以下、SSR理論)により考察されている。Carver and Scheier(1981)の自己意識の制御理論(control theory)を集団研究に取り入れたのが、SSR理論である。

SSR理論によれば、公的自己意識と私的自己意識は、SIの顕在化を異なった行動や認知に結びつける効果を持つという。Abrams(1990)によると、SIが顕在化した状態で、公的自己意識が高まると、外から見られる自分に意識が向くため、内集団ひいきや外集団差別などの行動や、他者に対するステレオタイプ的認知が起こりにくいという。反対に、SIが顕在化した状態で私的自己意識が高まると、“集団成員としての自分”を強く意識するため、集団成員としての行動や認知を起こしやすいという。このように考えると、自己意識はSIの顕在化を集団行動に結びつける、あるいは結び付けないようにする、媒介要因の役割を果たすことになる。しかしここで、以下のような疑問が生じる。公的自己意識が高まり、“見られる自分”を意識する際に、意識されるのは誰の視線なのかという疑問である。Abrams(1990)では、公的自己意識は社会的望ましさにへの懸念を喚起させ、集団間差別を減少させる影響力を持つと予測している。しかしこの予測が成り立つのは、集団成員が所属集団の外部からの視線を意識する場合である。他の内集団成員からの視線を意識する場合には、むしろ忠実な、あるいは典型的な内集団成員として振舞おうとし、集団間差別の方向性が助長されるのではないか。

この点に関連する議論として、Abrams(1999)は、“参照される規範の種類により、集団間差別に対する影響の方向性が変わる”という主張を行っている。Abrams(1999)では、公的・私的自己意識という区分はしないで、それに代わるものとして“参照される規範”という要因を導入し、自己意識の高まりが集団間差別に対して一定の方向性を予測しないことを説明しようとしたのである。しかしながら、集団間差別の促進・抑制の問題を考える際には、“参照される規範”の問題よりも、むしろ“何が(誰が)自己意識を顕在化させるのか”という要因のほうが重要なのではないだろうか。

集団間差別は内外集団の比較の文脈の存在を前提として発生するものである。また、どの集団と、どのように比較されるかによって、集団成員の公的・私的自己意識の顕在化の様子が異なってくると予測される。先のAbrams(1999)の参照規範の概念では、この疑問や予測に対する直接的な回答とはなりえないと考えられる。集団間差別や集団内の差別に対する自己意識の影響を検討する場合には、内外集団の比較の文脈、すなわち“何が(誰が)自己意識を顕在化させるのか”という問題を、常に念頭に置く必要があるだろう。

黒い羊効果と内集団ひいき： 社会的アイデンティティ理論による解釈

1. 社会的アイデンティティ理論による両現象の解釈

集団成員性のみによって内集団成員への評価がおしなべて高くなるのだとしたら、黒い羊効果は説明できない。しかし、劣った内集団成員は、SIを脅威に晒す存在なので、この成員を切り捨てて集団全体の評価を守る必要がある。SI理論の観点では、黒い羊効果は、集団が内部の脅威を切り捨てて、自らの価値を守ろうとする方略であると解釈できる。内集団への同一視が高く、集団を離れたいときには、自分が内集団を出てゆくのではなく、気に入らない他の成員を自分の仲間と認めないという意味で低く評価し、切り捨てると考えられる。

劣った内集団成員を低く評価するという現象は、小集団(small group)研究においても、集団凝集性の維持という観点から指摘されてきた。Lauderdale, Smith-Cunnien, Parker, and Inverarity(1984)は、地位の高い専門家から法律問題に関する議論を行う能力を疑われた集団では、集団内の最も好ましくない成員を低く評価し、その他の成員と厳しく区別することで、集団の崩壊を防ぎ、凝集性が維持されたという結果を報告している。またこの際、専門家から厳しい評価を受けなかった集団では、このような現象は起きなかったという。社会集団においても、小集団に関するLauderdale et al. (1984)と同様のことが起こると考えられる。

SI理論による黒い羊効果の説明原理については、これまでいくつかの先行研究によってその妥当性が検討されてきた(Table 2)。しかし先行研究の内容には不十分な点が多く、別の理論的立場に対する、SI理論の優越性を立証できていない。黒い羊効果の発生時に、集団全体としては内集団のほうが高く評価されていることを示そうとする研究

が、幾つか行われた。Marques and Yzerbyt(1988)とMarques, Robalo, and Rocha(1992)は、ともに、集団成員の評価に加えて内外集団そのものの評価も測定し、黒い羊効果と内集団ひいきの同時発生を確認して、両現象が矛盾せずにSI理論から説明できることを示したとしている。しかしそれぞれに、様々な問題点が指摘される。

(1) 内外集団の設定に関する問題

Marques and Yzerbyt(1988)は、法学科と哲学科の学生を内外集団とし、両集団成員のスピーチ能力を比較するという実験を行った。法学科の学生である被験者は、同レベルの演説をする哲学科の学生と比較して、演説の上手な法学科の学生をより高く、演説の下手な法学科の学生をより低く評価した。加えて、学科全体の演説レベルについては、法学科のほうを高く評価した。この結果により、黒い羊効果と内集団ひいきが同時に発生したとされている。しかし、法律関係の職業では、裁判等での演説能力が極めて重要であるのに対して、哲学科では、論文等での論証能力のほうが、演説よりもよほど重要である。つまり、法学科の演説能力が高く評価されても、両学科の専門性の違いが反映されたのみである可能性もあり、内集団ひいきの測定は不十分であるといえる。

Marques, Robalo, and Rocha(1992)では、被験者自身が通う高校の生徒の方が、ライバル高校の生徒よりも、好ましい生徒はより高く、好ましくない生徒はより低く評価され、黒い羊効果が見られた。また、生徒全体に対する評価を比較すると、被験者の高校の生徒はライバル高校より高く評価され、内集団ひいきが見られたという。しかしこの研究では、自分の高校を内集団、“最も嫌いな高校”を外集団と設定している。その上、自分の高校を“最も好きな高校”と回答した者のみを被験者としていた。このような手続きは、内集団のほうが外集団よりも高く評価されるという結果を誘導しているといえ、適切ではないと考えられる。

Marques, Abrams, Paez, and Martinez-Taboada(1998)では、犯罪に関する記事の登場人物を評価する際の、属性中心の帰属スタイル、状況中心の帰属スタイルというカバーストーリーを用いて、実際には最小条件集団を形成しての実験を行った。内外集団の帰属スタイル(これが集団規範に当たる)に一致した成員と、逸脱した成員を評価させた。その結果、規範に同調した成員同士を比較すると内集団成員のほうが高く評価された。規範に逸脱した成員同士の比較では、内集団成員のほうが低く評価されたという。同時に、帰属スタイルそのものにつ

Table 2 黒い羊効果と内集団ひいきに関する研究一覧

論文名	被験者	内/外集団	黒い羊効果	内集団ひいき	両現象の相関
1 Marques & Yzerbyt (1988), 実験1	大学法科生	法学科/哲学科	○	○ (学科の演説レベル・1項目)	未検討
2 同上, 実験2	大学法科生	法学科/哲学科	○	○ (同上, 内外集団の設定と評価次元の関連性に問題有)	未検討
3 Marques, Robalo, & Rocha(1992), 実験2	高校生	自分の高校/ ライバル高校	○	○ (内外集団の生徒全体の評価を比較=内外集団の設定に問題有)	未検討
4 Branscombe, Wann, Noel, & Coleman(1993)	カンザス大生	カンザス大バスケットファン/ オクラホマ大バスケットファン (ともにカンザス大生)	○注2	測定なし	未検討
5 Khan & Lambert (1998)	大学生	男性/女性 or 女性/男性	○	○ (好ましい内外集団成員の評価を比較=測定法に問題有)	未検討
6 松崎友世(1999)	K音大生	K音大/ T音大学生	×	○ (集団内の優等生の割合を推定)	未検討
7 大石・吉田(1999a)	短大看護学生	看護専攻/ 一般学生	○注2	○ (分配マトリックス)	○
8 大石・吉田(1999b)	短大保育学生	保育科/ 英文科学生	○	○ (特性語, 5項目7件法)	○注4
大石・今野(2000) =8に加筆	同上	同上			
9 大石・吉田(1999c)	短大看護学生	看護専攻/ 一般学生	○注3	○ (イメージ高群では特に) (分配マトリックス)	×

注1. ○は有意な結果が得られたもの。×は有意な結果が得られなかったもの。

注2. 同一視：被験者の内集団への同一視(identification)

注3. イメージ高群：看護学生と一般学生のイメージ間の差異が大きいと回答した被験者。

注4. 好ましい人物では正の相関が有意、好ましくない人物では負の相関の傾向が見られるも n.s. であった。

いては、内集団の帰属スタイルのほうが高く評価された。Marques et al.(1998)はこの実験で、黒い羊効果における集団成員の評価次元に、単なる好ましさではなく集団規範への同調と逸脱の要因を導入し、黒い羊効果を確認したとしている。そして、これと同時に内集団ひいきも発生したと主張している。しかし、内外集団の設定のしかたから、“外集団の規範に同調した成員”は、“内集団の規範から逸脱した成員”と等しくなる。そのため、評価対象の集団成員が事実上“内集団の規範に同調した成員”と“内集団の規範から逸脱した成員”だけになり、“内外集団の、好ましい人物と好ましくない人物(あるいは、規範に同調した人物と逸脱した人物)”という、“計4人の”集団成員の比較という実験デザインが成立していない。これは、黒い羊効果の実験デザインとしては重大な問題点といえる。

(2) 内集団ひいきに関する実験計画の不十分さの問題

Marquesら以外では、Khan and Lambert(1998)や松崎(1999)が、黒い羊効果と内集団ひいきの同時発生を示す試みを行っている。Khan and Lambert(1999)は、ワシントン大学の男女学生を被験者とし、男性と女性を内外集団に設定した。被験者自身と同じ性別を内集団、もう一方の性別を外集団として実験を行った。実験デザインは、被験者の性別×ターゲット人物の性別×コメントの内容(常識的・侮辱的)というものであった。集団成員は、学生同士の会話のプロトコルの記述文という形で提示された。被験者は会話している人物に関して、好ましさ、親しみやすさ、失礼さ、自立しているかについて11件法で評定した。その結果、好ましさがあいまいな人物どうしの会話では、内集団成員が高く評価され、内集団ひいきが発生したとされた。また、好ましくない人物どうしの会話では、内集団成員が低

く評価され、黒い羊効果が生じたとされた。しかし、会話プロトコルの内容は、“好ましくない人物”については相手を侮辱するものであるのに対し、“好ましさがいまいいな人物”の会話は常識的で良心的なものであった。つまり実質上は“好ましい人物”と“好ましくない人物”を評定させたのみであり、そこで“好ましい内集団成員はより高く、好ましくない内集団成員はより低く評価され”，黒い羊効果が発生したのみであった。

(3) 内集団への同一視の影響に関する問題

Branscombe, Wann, Noel, and Coleman(1993)は、黒い羊効果研究に内集団への同一視の要因を取り込んだ。Branscombe et al.(1993)は、カンザス大学の学生(被験者)をカンザス大学バスケットボールチームへの同一視の高低群に分け、カンザス大学学生新聞の記者を評定対象として、内集団・外集団(カンザス州出身のカンザス大生か、オクラホマ州出身のカンザス大生か)×記者の好ましさ(ファンとしての熱心さの高低)×試合の勝敗(内集団への脅威の有無)による被験者間計画での実験を行った。その結果、同一視高群では、内集団の規範に逸脱した内集団成員が低く評価された、つまりカンザス出身の記者は熱心なファンならばより高く、不熱心なファンならばより低く評価された。内集団への同一視低群では、外集団成員のほうが、熱心なファンであればより高く、不熱心なファンならばより低く評価された。すなわち、集団同一視高群のみで黒い羊効果が生じ、同一視低群では黒い羊効果とは逆の方向性が見られたのである。

Branscombe et al.(1993)は、Devos, Comby, and Deschamps(1996)などにも引用され、黒い羊効果に対する集団同一視の効果を明示した研究として評価されている。しかしながら、Branscombe et al.(1993)の実験には、内集団と外集団の区別が明確でなく、内外集団の比較の文脈も不明確であるため、同一視の効果の立証をなし得ているとは言い難い。Branscombe et al.(1993)では、評定対象となる内集団成員を「カンザス大学バスケットボールチームのファンであるカンザス大生(カンザス州出身者)」、外集団成員を「オクラホマ大学バスケットボールチームのファンであるカンザス大生(オクラホマ州出身者)」としているので、当然被験者はカンザスチームのファンであるカンザス大学学生(カンザス州出身)でなければならない。この実験では、出身地とひいきのチームは一致するものとして扱われているので、被験者はカンザス州出身者のみでなければならない。しかし、「方法」の記述を詳細に読む限りでは、そうした区別はなされておらず、心理学

の授業の参加者を被験者としている。従って、被験者の中には、カンザス州出身者のみでなく、オクラホマ州出身者も含まれていた可能性がある。被験者はカンザス大学チームへの同一視高群・低群に分けられているが、同一視低群にオクラホマ州出身のカンザス大生が多く含まれていれば、同一視低群の被験者にとってはオクラホマチームのファンであるカンザス大生が内集団成員ということになる。この場合、同一視低群で外集団成員のほうがより極端に評価されたのは、黒い羊効果が発生していたものと考えられることもできる。

(4) スキーマの複雑さに基づく社会的認知研究との関連性についての問題

さらにBranscombe et al.(1993)では、複雑性-極端性仮説(Linville, 1982)と態度の極性化理論(Millar & Tesser, 1986)およびSI理論の3者の関連の検討が試みられている。複雑性-極端性仮説と態度の極性化説は、ともに内集団のスキーマのほうが外集団のそれよりも多くの状況を含んでおり、複雑な構造であるとの見解を共有しているが、内外集団成員の評価に関しては、正反対の予測を導く。複雑性-極端性仮説では、複雑なスキーマにおいてはスキーマ内部で矛盾する情報が打ち消しあうため、外集団成員よりも中庸に評価されやすいとした。一方態度の極性化説は、ある対象についてコミットメントさせられる、すなわち態度や評価の表明に対して言質を取られる状況では、その対象について熟考するため、スキーマが複雑になるとしている。この時、幅広い情報を含むスキーマのうち、極端な情報がターゲットの評価に用いられ、熟考された対象への評価は極端になるという。内外集団に関して言えば、熟考されるのは内集団のほうであり、内集団成員の評価が極端になると予測される。

Branscombe et al.(1993)では、確かに集団同一視高群のみで黒い羊効果が生じ、同一視低群では黒い羊効果とは逆の方向性、すなわち複雑性-極端性仮説による予測と一致した結果が示されている。しかしこの研究の実験デザインでは、同一視高群では内集団成員について詳細な情報処理が行われてスキーマが複雑になり、成員への評価が極端になったとの説明を排除できない。

加えて、この研究については、Marques et al.(1998)と同様の根本的な問題点が指摘される。Marques, Yzerbyt, and Leyens(1988)が提示した黒い羊効果は、内集団と外集団の間に直接的な利害関係がない場面を想定していた。しかしBranscombe et al.(1993)では、内外集団の間に勝負を争うという、ゼロサム型の利害関係がある場合を扱って

る。カンザス大学とオクラホマ大学のバスケットチームが対戦する場合、オクラホマチームのファンであるカンザス大学学生新聞記者は、カンザスチームのファンであるカンザス大生にとっては、いわば“裏切り者”である。Branscombeらは、利害関係の存在や影響力については一切言及していないが、この実験の結果は、内外集団の利害関係の影響からも説明でき、その場合はSI理論も社会的認知の理論も共に不必要となるのである。

(5) 黒い羊効果の測定の不十分さに関する問題

また松崎(1999)は、K音楽大学学生を被験者とし、内集団をK音楽大学、外集団をT音楽大学として実験を行った。実験デザインは、内集団のSIへの脅威(有無：被験者間)×集団(内・外：被験者間)×成員の事例(優等生・劣等生：被験者内)であった。集団成員の提示方法は、優等生および劣等生に関する事例文章を提示する方法をとった。実験の結果、内集団のほうが優等生の割合が多く推定され、内集団ひいきが有意傾向であった。また、内集団同一性(identification = 本論文における“同一視”と同義)の高い者は内集団の優等生の割合を多く推定した。すなわち、内集団ひいきの傾向の存在と、内集団への同一視と内集団ひいきの傾向に正の相関が示された。しかし黒い羊効果に関しては、内外集団の要因と集団成員の優劣の要因による分散分析において、交互作用が見られず、黒い羊効果は示されなかった。この研究の結果は興味深いものであるが、集団成員の評価に関する測定項目数が少ない(2項目のみ)など、さらに検討が必要であるといえる。またこの研究では、内集団ひいきの指標と黒い羊効果の指標の相関関係など、両現象の関連についての検討はなされておらず、両現象が同時に発生するかどうかを検討したのみである。

(6) 内集団ひいきの測定指標に関する問題

最後に、先行研究における内集団ひいきの測定方法の影響について議論する。内集団ひいきの測定方法には、分配マトリックス(Tajfel et al., 1971)、集団の評価を特性語や形容詞尺度で測定する方法(Marques, Roblao & Rocha, 1992; Marques & Yzerbyt, 1988)などがある。これらの方法でも、内集団ひいきが確認されている。

しかし、黒い羊効果と内集団ひいきの関連性を検討する上では、内集団ひいきの測定には形容詞尺度ではなく、分配マトリックスを用いるほうがよいと考えられる。なぜなら、「○○集団について」という形で評価を求めた場合、集団全体のイメージは漠然としていて答えにくいいため、「○○集団の典型的、一般的、もしくは平均的」な成員をイメージして回

答する可能性が高い。特に、内外集団成員の評価を形容詞尺度等によって測定する場合には、集団に対する評価と集団の典型的な成員の評価は類似しやすくなるといえる。また黒い羊効果は、内集団成員が典型的な人物も含めて全体的に高い評価水準で認知される一方、集団全体の足を引っ張る逸脱者が差別される現象である。黒い羊効果という現象の特徴という側面から見ても、内集団の典型的な人物の評価は、自ずと好ましい人物とは正の相関、好ましくない人物とは負の相関を示すといえるのである。このような批判を避けるため、形容詞や特性語による評定尺度による実験と、分配マトリックスによる実験との結果を比較し、さらに検討してゆく必要があるといえよう。

本論のまとめ及び今後必要とされる研究

これまで述べてきたように、黒い羊効果と内集団ひいきという2つの現象は、劣った成員の評価を巡って一見矛盾するかに見えるが、ともにSI理論から説明されている。そして、この2つの現象をSI理論の立場から包括的に理解・説明しようとする研究は、すでにいくつも行われている。しかし従来の先行研究には6つの問題点が指摘された。今後の研究では、この6つの問題点を考慮した上で、黒い羊効果と内集団ひいきの関連を分析してゆくことが重要である。その際、内集団への同一視は、SIを顕在化させる重要な要因であり、黒い羊効果と内集団ひいきを促進させる要因であると考えられる。そのため、先行研究でもBranscombe et al.(1993)が取り上げているが、この研究には先述のような問題点があったのである。

黒い羊効果と内集団ひいきの関係、および両現象に影響を与える要因としての、内集団への同一視の役割を、SI理論の立場から包括的に説明するためには、SI理論から導かれる以下の3つの予測を検討する研究が必要となる。

- ① 内集団への同一視が高い者において、黒い羊効果が見られやすい。
- ② 内集団への同一視が高い者ほど、内集団ひいきが強い。
- ③ 内集団ひいきと黒い羊効果の間には相関関係が見られる。すなわち、内集団ひいきの強さは、好ましい内集団成員の評価とは正の相関、好ましくない内集団成員の評価とは負の相関が見られる。

Tajfel et al.(1971)の最小条件集団実験では、些細な基準で実験的に2つの集団に分けられた場合で

も、分配マトリックスという鋭敏な測定指標において、内集団ひいきが観察された。内集団ひいきは、人間が2つのカテゴリー(内集団と外集団)を認識した時に現れる、頑健で基本的な方向性である。しかし黒い羊効果の場合は、この頑健な方向性をあえて裏切って、劣った仲間を切り捨てるのであるから、内集団への同一視が低い集団では発生しにくいと予測される。

さらに、SIの顕在化に関連の深い要因として、公的・私的自己意識の影響を仮定するSSR理論も提出されていることから、SIの顕在化と自己意識の関連を検討することも重要である。加えてこれらの要因が、内集団ひいきに代表される集団間差別、および黒い羊効果のような集団内の差別に及ぼす影響を検討する必要があるといえる。

引用文献

- Abrams, D. 1990 How do group members regulate their behavior? An integration of social identity and self-awareness theories. In D. Abrams & M.A. Hogg (Eds.) *Social Identity Theory: Constructive and critical advances*. London: Harvester-Wheatsheaf.
- Abrams, D. 1999 Social identity, social cognition, and the self: The flexibility and stability of self-categorization. In Abrams, D. & Hogg, M.A. (Eds.) *Social identity and social cognition*. Oxford: Blackwell, 197-229.
- Adorno, T.W., Frenkel-Brunswik, E., Levinson, D.J. & Sanford, R.M. 1950 *The Authoritarian Personality*. New York: Harper.
- ブラウン, R. 1993 (黒川正流・橋口捷久・坂田桐子(訳)) グループ・プロセス 北大路書房, 183-281. (Brown, R. 1988 *Group processes: Dynamics within and between groups*. Oxford: Basil Blackwell.)
- Branscombe, N.R., Wann, D.L., Noel, J.G. & Coleman, J. 1993 In-group or out-group extremity: Importance of the threatened social identity. *Personality & Social Psychology Bulletin*, **19**, 381-388.
- Carver, C.S. & Scheier, M.F. 1981 Self-consciousness and reactance. *Journal of Research in Personality*, **15**, 16-29.
- Devos, T., Comby, L. & Deschamps, J-C 1996 Asymmetries in judgements of ingroup and outgroup variability. *European Review of Social Psychology*, vol 7, 95-144.
- Dollard, J., Doob, L.W., Miller, N.E., Mowrer, O.H. & Sears, R.R. 1939 *Frustration and Aggression*. New Haven: Yale University Press.
- Ellemers, N., Doosje, B., van Knippenberg, A. & Wilke, H. 1992 Status protection in high status minority groups. *European Journal of Social Psychology*, **22**, 123-140.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- Higgins, E.T. & King, G. 1980 Accessibility of social constructs: Information processing consequences of individual and contextual variability. In N. Cantor & J. Kihlstrom (eds.), *Personality, cognition and social behavior*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Khan, S. & Lambert, A. 1998 Ingroup favoritism versus black sheep effects in observations of informal conversations. *Basic and Applied Social Psychology*, **20**, 263-269.
- Lauderdale, P., Smith-Cunnien, P., Parker, J. & Inverarity, J. 1984 External threat and the definition of deviance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 1058-1068.
- Linville, P.W. 1982 The complexity-extremity effect & age-based stereotyping. *Journal of Personality & Social Psychology*, **42**, 193-211.
- Marques, J.M., & Yzerbyt, V.Y. 1988 The black sheep effect: Judgmental extremity towards in-group members in inter- and intra-group situations. *European Journal of Social Psychology*, **18**, 287-292.
- Marques, J.M., Robalo, E.M. & Rocha, S.A. 1992 In-group bias and the black sheep effect: Assessing the impact of social identification & perceived variability on group judgements. *European Journal of Social Psychology*, **22**, 331-352.
- Marques, J.M., Yzerbyt, V.Y. & Leyens, J.P. 1988 The 'black sheep' effect: Extremity of judgements towards in-group members as a function of group identification. *European Journal of Social Psychology*, **18**, 1-16.
- Marques, J.M., Abrams, D., Paez, D. & Martinez-Taboada, C. 1998 The role of categorization and in-group norms in judgments of groups and their members. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 976-988.
- Minard, R.D. 1952 Race relationships in the Pocahontas coal field. *Journal of Social Issues*, **8**, 29-44.

- 松崎友世 1999 社会的アイデンティティ理論における内集団ひいきと黒い羊効果 日本社会心理学会第40回大会発表論文集, 348-349.
- Millar, M.G., & Tesser, A. 1986 Thought-induced attitude change: The effects of schema structure and commitment. *Journal of Personality & Social Psychology*, **51**, 259-269.
- 大石千歳・今野裕之 2000 黒い羊効果と内集団ひいき—ラベル提示と記述提示を用いて— 筑波大学心理学研究, **22**, 105-112.
- 大石千歳・吉田富二雄 1999a 内集団ひいきと黒い羊効果—社会的アイデンティティ理論の観点から— 日本心理学会第63回大会発表論文集, p93.
- 大石千歳・吉田富二雄 1999b 内集団ひいきと黒い羊効果(2)—集団成員への評価と集団全体への評価および人物の提示方法の比較— 日本グループ・ダイナミクス学会第47回大会発表論文集, Pp88-89.
- 大石千歳・吉田富二雄 1999c 内集団ひいきと黒い羊効果(3)—黒い羊効果と分配マトリックス指標による内集団ひいきの同時発生— 日本社会心理学会第40回大会発表論文集, Pp150-151.
- 大石千歳・吉田富二雄 2000 内集団成員の評価と社会的アイデンティティ—内集団同質性認知を媒介として— 教育相談研究, **38**, 19-31.
- Rokeach, M. (ed.) 1960 *The open and closed mind*. New York: Basic Books.
- Runciman, W.G. 1966 *Relative deprivation and social justice*. Berkeley, California: University of California Press.
- Sherif, M. 1951 A preliminary experimental study of intergroup relations. In J.H. Rohrer and M. Sherif (Eds.) *Social psychology at the crossroads*. New York: Harper.
- Sherif, M., Harvey, O.J., White, B.J., Hood, W. & Sherif, C.W. 1961 *Intergroup conflict and cooperation: The Robbers cave experiment*. Norman, Oklahoma: University of Oklahoma Institute of Intergroup Relations.
- Skevington, S. 1981 Intergroup relations and nursing. *European Journal of Social Psychology*, **11**, 43-59.
- Tajfel, H. 1978 *Differentiation Between Social Groups*. London: Academic Press.
- Tajfel, H., & Wilkes, A.L. 1963 Classification and quantitative judgement. *British Journal of Psychology*, **54**, 101-114.
- Tajfel, H., Billig, M., Bundy, R.P. & Flament, C. 1971 Social categorization and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, **1**, 149-177.
- ターナー, J.C. 1987 自己カテゴリー化理論. ターナー, J.C., ホッグ, M.A., オークス, P.J., ライカー, S.D. & ウェザレル, M.S. (蘭 千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美(訳)) 1995 社会集団の再発見—自己カテゴリー化理論— 誠信書房, 54-88. (Turner, J.C., Hogg, M.A., Oakes, P.J., Reicher, S.D., & Wetherell, M.S. 1987 *Rediscovering the social group: A Self-Categorization Theory*. Oxford: Basil Blackwell.)
- Turner, J.C. & Brown, R.J. 1978 Social Status, cognitive alternatives, and intergroup relations. In H. Tajfel (ed.) *Differentiation between social groups*. London: Academic Press